

令和元年12月9日

「震災ミュージアムモニターツアー」

市民団体代表 高谷和生

熊本地震から3年半が過ぎた12月初旬「平成28年熊本地震の記憶や経験の伝承」を学ぶ県知事公室主催の震災ミュージアムモニターツアーに参加した。県が示す南阿蘇等の「回廊型の震災ミュージアムイメージ」各地で、その時の瞬間が止まったままの「地震断層や被災建物等の震災遺構」を巡り、思わず胸が痛くなった。

初めて訪れた「中核拠点」に位置づけられた東海大学阿蘇キャンパス1号館は「震度7・激震」を如実に語る被災状況と現われた地震断層の迫力に目を奪われた。また、この地で実習する学生による震災の語りは、南阿蘇を愛してやまない姿そのものだった。参加者で熊本地震体験者からも、当時経験のつぶやきが幾つも重ねられ、まさに「熊本地震の記憶を継承する学びの旅」であった。

一方、幾つかの課題も見えてきた。県「震災ミュージアム構想有識者会議」当初に、委員からも指摘された益城町他での断層や被災建物等の対象候補の「地域や種類の偏在」「保存対象を広範とすべき」課題は解消されていなかった。これだけ甚大な被害があった熊本市内に震災遺構が一つも無いのは合点がいかない。

東日本大震災では、震災遺構・遺物の保存に向け活動した「3・11震災伝承研究会」等が、保存すべき構造物や自然景観を選定し、県民も広く意見を出し合い協議を進めたという。記憶継承の要となる「熊本の震災遺構」を今一度丁寧に掘り起こしてほしい。さらに戦争や被爆体験の継承、戦争遺産の保存活動や学びの旅に取り組んでいる市民団体とも連携し、記憶継承を確実なものとしてほしい。熊本地震震災ミュージアムに期待したい。

